

当事者意識は社会的手抜きを低減するか

本多ハワード 素子・村田 紗彩

Does the sense of commitment reduce social loafing?

Motoko HONDA-HOWARD and Saya MURATA

Two experiments were conducted to investigate if the sense of commitment controls social loafing of group members (Study one $N = 12$, Study two $N = 55$). The group task was to present a group discussion's content. Independent variables were presentation role (decided before the discussion/after the discussion) and decision-making style (a presenter/group).

Results indicated that individual productivity was higher under the group-decision-making condition. However, there were no effects of the role on the sense of commitment nor individual productivity.

Key words : *sense of commitment* (当事者意識), *social loafing* (社会的手抜き), *productivity* (生産性)

はじめに

第2著者は学生時代に飲食店でアルバイトをしていた。アルバイトは約40名で、その多くが学生であった。当初は客から多くの注文をとるための工夫や、売上を増やすためにどうするかなどについてアルバイト同士で考えながら仕事をしていたが、先輩のメンバーが卒業・就職してメンバーが交代した後は、仕事が増えて負担が大きくなった。ある日、「自分たちがやらなくても先輩たちが仕事をしてくれる」という発言を耳にして、社会的手抜き (social loafing) が生じていることを実感した。集団内の個々人の作業量の低下は、手を抜く者のフリーライディング、手を抜かない者への負担の増加を意味していた。真面目に働いているメンバーも馬鹿らしくなり、集団全体の動機づけが低下、サッカー効果が生じた。当初、同じアルバイトの職場には、「意識の高さ」があったが、この意識は、当事者意識と言い換えることができるのではないかと考え、実験的に検討することとした。

社会的手抜き

個人作業状況よりも集団作業状況において、一人当たりの仕事量が低下する現象が社会的手抜きである (Latané, Williams, & Harkins, 1979)。社会的手抜きは、個人の仕事量が識別されない場合に生じやすい。社会的手抜きを低下させるためには主として2つ、成果の識別可能性や評価可能性を高める方法と、集団課題への自己関与度を強めるなど、課題の誘因を上げる方法がある (小窪, 1996)。また、集団への同一化を高めると、逆に集団条件下の社会的努力 (social laboring) が上昇することも指摘されている (小窪, 2018)。

現実場面における社会的手抜きとして、重森 (2012) は、ヒューマンエラー検出のためのダブルチェックの手抜きを検討した。その結果、単独条件においてエラー検出数が多くなり、複数条件 (複数人でダブルチェックする) でヒューマンエラー検出数が低くなった。自分のチェックが他の参加者に再チェックされる場合も、他の参加者のチェックを自分が再チェックする場合でも、同様に社会的手抜きが生じた。

集団の成員構成により社会的手抜きの生起が異なることも示されている。内田・釘原・手塚・國

部・土屋 (2016) は、集合的効力感を評価する場面での社会的な手抜きについて検討した。単独条件 (単独で張力維持課題を行う)、劣位条件 (実験参加者よりも課題遂行能力に優れる男性 2 名と課題を行う)、優位条件 (課題遂行能力に劣る女性 2 名と課題を行う) の 3 条件を設定した結果、劣位条件において、単独条件、優位条件よりも努力量が低くなった。一方、優位条件は単独条件と同程度の努力量であった。優位条件の実験参加者は、他者に対する肯定的な能力期待が生じないため、集団の成功のために自身の努力が必要不可欠だと判断したことが推測された。また、他者の課題遂行能力を手掛かりに集合的効力感を評価する場面で社会的な手抜きが生じ、自己の課題遂行能力を手掛かりに集合的効力感を評価する場面では個人の努力量が維持されることが示された。

文化的な自己観との関連性についても検討されている。阿形・釘原 (2008) は、個人条件と集合条件を操作して社会的な手抜きを生起させ、さらに、個人特性として相互協調的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) による相違を検討した。課題は色鉛筆 12 本の袋詰め作業で、個人条件では自分が完成品を空の袋に入れるため、自分の成果が他者から容易に認識される状態にした。集合条件では、架空の 3 名の名簿と複数の完成品が既に置かれており、自分の成果が認識されにくい状況であった。社会的な手抜きは、相互協調的自己観が低い群では生じたが、相互協調的自己観が高い群では生じなかった。

当事者意識

先述のアルバイトの経験では、売上への貢献は複数の人間が関わるため個人の成果として区別しにくい。アルバイトは時給制のために、貢献しても個人に還元されにくく、外的誘因による動機づけの上昇は困難である。たとえば、リーダーが評価して褒めるなど、情動的な報酬も動機づけになるが、実際には同じ年頃のアルバイト学生同士がシフトを組んで集団課題に取り組んでいる。メンバーの交替も多いので流動的で、情動的評価のみに頼っても効果は見込めない。筆者らはこのような集団状況下で集団課題への関与度を高める方法として、個々のメンバーの当事者意識を高める工

夫が効果的ではないかと考えた。当事者意識とは、あることを「自分がやる」という意味、もしくは「自分のことのように考える」という意味であり、自分の頭で考えて、主体的に動くということである。「自分事」で「他人事」ではない、「責任」の認識を伴う (神吉, 2019)。本研究においても、当事者意識を「集団の成果に自分の働きが関わる。自分の働きによって課題遂行のプロセスが異なってくる」という認識とした。

目的と仮説

当事者意識を高める要因については、集団内での役割の割り振り、集団の決定スタイルの 2 要因の組み合わせとし、これら 2 要因の条件を設定した複数の集団状況下を実験的に作り、比較検討することとした。成員の階層性が小さく、流動性の高い集団においては、集団内の役割を固定することでフリーライディングが助長されると考えられる。そのため、役割を決めない方が当事者意識は高まるとした (仮説 1)。また、集団の決定スタイルは、集団の代表者による判断よりも、集団成員全員で判断する方が、当事者意識が高まろうとした (仮説 2)。同様に、個人レベルの生産性は、役割を決めず (仮説 3)、集団決定の場合に高くなる (仮説 4)、とした。

本研究では、集団の階層性の小さい小集団を対象に、集団討議課題を用いた 2 つの実験を行った。集団課題は、「集団討議によりアイデアを生成し、集団の意見をとりまとめて発表すること」とした。独立変数は、「役割」と「決定」の 2 要因とした。「役割」は、発表者の役割であり、集団討議前に決定する群と討議後に決定する群の 2 条件とした。また「決定」は、「集団で発表内容を検討して決定する」場合と「発表者が発表内容を検討して決定する」場合の 2 条件とした。

実験 1

1. 方法

実験デザイン 独立変数は役割 (役割決定群・役割未決定群) と決定 (発表者決定群・集団決定群) の 2 要因、 2×2 の実験デザインであった。

従属変数 当事者意識 (「自分が言わないと進

まないと思った」ほか全3項目)、参加意識(「話し合いに満足に参加した」ほか全3項目)、満足度(「話し合いの結果に満足した」ほか全2項目)、個人の意見数の4変数を用いた。個人特性として外向性(「どちらかという、にぎやかな性格です」ほか全5項目)、調和性(「誰にでも親切にするよう心がけています」ほか全5項目)、誠実性(「どちらかという、飽きっぽい方です(逆転)」ほか全5項目)の3変数とした(村上・村上, 1997)。すべて、「全くそう当てはまらない(1)」から「非常に当てはまる(6)」の6件法で回答してもらった。個人意見数として、討議中の意見数を個人別に測定した。

操作チェック 発表者の決め方と発表内容の決め方について、討議後に自由記述形式で回答を求めた。

実験日時 2019年7月16日～7月23日

実験参加者 S女子大学生12名(19～22歳)であった。実験への協力は任意であった。役割条件、決定条件ともに1グループ3名を4群に無作為に割り当てた。

実験材料 付箋紙、色ペン、メモ用紙を配布した。

手続き 実験参加者には「集団討議の実験」であると事前に伝えて、参加協力してもらった。各グループは個別に集合し、集合後、個人特性に関する質問項目に回答してもらった。その後、発表の役割と最終意見の決定について教示を行った。役割の決定群には、「話し合いの内容を発表する人を最初に決めます」、未決定群には「話し合いの内容を発表する人を、話し合い後にくじ引きで決定します」と教示した。また、最終意見の決定に関して、発表者決定群には「最後に発表を行ってもらいますが、発表者の方が最も良いと思った意見を独断で決め、発表していただきます」、集団決定群には「最後に発表を行ってもらいますが、メンバーで話し合い最も良いと思った意見を発表していただきます」と教示した。教示後、役割決定群は討議前にくじ引きで発表者を決定し、役割未決定群は討議後にくじ引きで発表者を決定した。集団討議前には、「これから、“新聞のニュースに関するメリット・デメリット”について、ブレインストーミングを用い、話し合いを7分間行ってもらいます。ブレインストーミングはアイ

ディアを出すことによって、連鎖反応や発想の誘発を期待する会議形態であるため、結論は出さず、質より量を重視するようにしてください。また、他者の意見を批判しないでください。それでは、開始します。発表テーマに関しては、話し合い終了後に発表します」と伝えた。

7分の集団討議後、「今、話し合ってもらった内容を踏まえて、社会で起きていることに関心をもってもらうには、どうしたらよいか、意見を参考に2分でまとめてください。その後、簡潔に発表してください」と教示を行った。発表前に、発表者決定群には、「発表者の方が最も良いと思う方法を一人で決定してください」、集団決定群には、「メンバー全員で最も良いと思う方法を話し合って決めてください」と再度、指示した。

発表後には、当事者意識、参加意識、満足度に記入するために質問紙に回答してもらった。回答を回収後、デブリーフィングを行い、実験協力に対する感謝を伝えて、謝礼にお菓子を配布した。

実験参加者が生産性を意識しすぎず、かつ個人レベルの意見数を測定できる方法を考えた。そこで各人の各意見を全員同色の付箋紙に、各人が異なる色のカラーペンで記入してもらい、意見数を算出した。意見内容が他のメンバーと重複していてもカウントした。

2. 結果

外向性、調和性、誠実性について、逆転項目は方向性をそろえてCronbachの信頼性係数を算出した。外向性($\alpha = .61$)、調和性($\alpha = .62$)、誠実性($\alpha = .79$)の値は許容範囲として合計点を算出した。参加意識、満足度、当事者意識についても、同様に信頼性係数を算出したところ、当事者意識($\alpha = .56$)、参加意識($\alpha = .66$)、満足度($\alpha = .43$)となった。満足度の値は特に低く、当事者意識、参加意識のみを分析に使用した。各変数は項目の算術平均値とした。各条件の当事者意識、参加意識、個人意見数、個人特性の平均値と標準偏差をTable 1に示す。

次に、役割と決定の2要因を独立変数に、個人特性の外向性、調和性、誠実性の3得点を共変量とし、当事者意識、参加意識、個人意見数を従属変数とした共分散分析を行った。

当事者意識は、役割($F(1,5) = .41, ns, \eta_p^2$

Table 1 各群の当事者意識、参加意識、意見数の平均値と標準偏差

	役割決定				役割未定			
	発表者決定		集団決定		発表者決定		集団決定	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
当事者意識	3.44	.51	3.22	1.71	3.11	.69	3.00	.58
参加意識	4.33	.58	5.00	1.00	4.33	.33	4.56	.77
個人意見数	6.67	.58	15.00	2.00	6.33	1.52	13.00	2.65

= .08)、決定 ($F(1,5) = .04$, ns , $\eta^2_p = .01$) の主効果、交互作用もなかった ($F(5,1) = .09$, ns , $\eta^2_p = .02$)。また、外向性 ($F(5,1) = 1.04$, $\beta = .39$, ns , $\eta^2_p = .17$)、調和性 ($F(5,1) = 2.94$, $\beta = .76$, ns , $\eta^2_p = .37$)、誠実性 ($F(1,5) = .03$, $\beta = -.04$, ns , $\eta^2_p = .01$) の効果もなかった。次に、参加意識を従属変数としたが、役割 ($F(1,5) = .01$, ns , $\eta^2_p = .00$)、決定 ($F(1,5) = 1.77$, ns , $\eta^2_p = .24$) の効果はなく、交互作用もなかった ($F(1,5) = .20$, ns , $\eta^2_p = .04$)。外向性 ($F(1,5) = .73$, $\beta = .27$, ns , $\eta^2_p = .13$)、調和性 ($F(1,5) = .79$, $\beta = .10$, ns , $\eta^2_p = .02$)、誠実性 ($F(1,5) = .68$, $\beta = .17$, ns , $\eta^2_p = .12$) の影響もなかった。

個人意見数を従属変数とした分析では、役割の効果はなく ($F(1,5) = 4.01$, ns , $\eta^2_p = .45$)、決定の主効果がみられたが ($F(1,5) = 66.17$, $p < .001$, $\eta^2_p = .93$)、交互作用はなかった ($F(1,5) = .99$, ns , $\eta^2_p = .17$)。個人意見数は、集団決定条件で、発表者決定条件よりも多くなった。個人特性のうち外向性 ($F(1,5) = 1.89$, $\beta = -.17$, ns , $\eta^2_p = .28$) の効果はみられず、調和性 ($F(5,1) = 4.64$, $\beta = -2.03$, $p < .10$, $\eta^2_p = .48$) と誠実性 ($F(5,1) = 5.49$, $\beta = 1.22$, $p < .10$, $\eta^2_p = .52$) の効果傾向がみられた。調和性はマイナス、誠実性はプラスの効果傾向であった。

3. 実験1の考察

実験1では、集団決定の場合に個人意見数が多くなることが示されたため、仮説4は支持された。その他、役割、決定の主効果、交互作用はみられず、仮説1、仮説2、仮説3は支持されなかった。また、個人特性の影響は個人意見数に傾向がみられただけであった。各変数の信頼性係数の低さから、項目の再検討の必要性和実験方法の改善点が複数みつかった。また、実験参加者数の

少なさにより、分析による検討も不十分であった。

実験2

実験2では、実験参加者の人数を増やし、集団討議ルールを明示するなど、実験方法を改善した。また、当事者意識、参加意識、満足度の項目を再検討して実施した。

1. 方法

実験デザイン 実験1と同様に、役割と決定の2要因の独立変数の 2×2 の実験デザインであった。従属変数は当事者意識、参加意識、満足度、個人意見数とした。外向性、調和性、誠実性の3変数を個人特性とした。当事者意識、参加意識、満足度の項目を追加・修正した (Table 2)。

実験参加者 S女子大学生55名 (19~22歳) で、実験参加は任意であった。1グループ6から7名とし、普段から交流のある学生同士が同じグループにならないようにして8グループに分けた。8グループを無作為に4群に割り当てた。

実験日時 2019年11月の授業時間中に、受講生を1教室に集めた。グループごとに机を集めて着席した。所要時間は約40分であった。

実験材料 正方形の付箋紙、カラーペン、メモ用紙、発表テーマを記載したポップを用いた。

手続き 手続きは実験1とほぼ同様であった。実験参加者は教室に集まり、各グループの机に集まって着席した。机には付箋紙、カラーペン、メモ用紙が配布された。最初に個人特性に関する質問項目に回答してもらった。実験者は用紙を回収してから、集団討議と発表に関する教示を行った。同じ教室で4群の操作をしたために実験補助者3名が各グループの机につき、教示を行った。その後、発表テーマについて「紙新聞をもっと利

Table 2 実験2の尺度項目内容

当事者意識	R	結局はだれかがやってくれるだろうという思いがあった 自分が意見を言わないと話し合いが進まないと思っていた 自分の発言で話し合いが変わると思った 話し合いには自分の働きに関わると思って参加していた
	R	なんとなく他人事だと思って参加していた 自分が一生けん命やると、いい話し合いになると考えていた
参加意識		話し合いに、十分、参加した 自分の意見を出すことができた 話し合いに十分、ついていった
	R	あまり話し合いについていけなかった
満足度		話し合いの進め方に満足した 話し合いの結果に満足した
	R	今回のメンバーでの話し合いに不満があった

Rは逆転項目

Table 3 各変数の信頼性係数、平均値および標準偏差

	α	M	SD	1	2	3	4	5	6
1 外向性	.85	3.26	1.01						
2 調和性	.71	4.34	.75	-.01					
3 誠実性	.72	3.38	.88	-.02	.48**				
4 当事者意識	.71	3.26	.60	.01	.18	.11			
5 参加意識	.72	4.67	.66	.30*	.32*	-.17	.45**		
6 満足度	.82	4.82	.89	-.14	.11	-.13	-.19	-.12	
7 個人意見数		3.16	1.39	.33*	.03	-.02	.15	.31*	-.20

$N = 51$. ** $p < .01$. * $p < .05$.

用してもらうためにはどうすればよいか」と記入したポップを各グループの机に配布した。

集団討議はブレインストーミング方式で、「紙新聞をもっと利用してもらうためには、どうすればよいか」をテーマとした。集団討議前に5分間の個人ワークとして意見を付箋紙に書き出してもらい、続いて3分間の自己紹介、その後10分間の集団討議に入った。

役割の操作として、役割決定群は個人ワークの前に、役割未決定群は、集団討議の終了後にくじ引きで発表者を決めてもらった。次に、「たった今話し合ってもらったアイデアの中から、良いと思ったものを3つ選んでください。3分間設けますので3分後、簡潔に発表してください」と教示を行った。その際、決定の操作として、発表者決定群には「発表者の方が最も良いと思う方法を独断で決定してください」と教示し、集団決定群

には、「メンバー全員で最も良いと思う方法を話し合って決めてください」と教示した。

発表後に、当事者意識、参加意識、満足度、操作チェックの質問項目に回答してもらった。回答終了後に質問紙を回収し、デブリーフィングを行った。協力への感謝を伝えて、謝礼のお菓子を渡した。

2. 結果

回答のうち、操作チェックにミスのない51名のデータを分析に用いた。外向性、調和性、誠実性と、当事者意識、参加意識、満足度の各尺度の信頼性係数は許容範囲であったため、項目の単純算術平均値を各変数の値とした。個人特性の3変数と当事者意識、参加意識、満足度、個人意見数の信頼性係数、平均値と標準偏差、相関係数をTable 3に示す。

役割と決定の2要因を独立変数に、外向性、調和性、誠実性の3得点を共変量とした共分散分析を行った (Table 4, Table 5)。

役割の効果はいずれの変数にもみられなかった。一方、決定の効果は個人意見数においてのみみられ、発表者決定群よりも集団決定群において個人意見数が多くなった ($F(1,44) = 4.61, p < .05, \eta^2_p = .10$)。外向性は、参加意識と個人意見数にプラスに影響した (参加意識 $F(1,44) = 5.03, \beta = .21, p < .05, \eta^2_p = .10$; 個人意見数 $F(1,44) = 5.40, \beta = .44, p < .05, \eta^2_p = .11$)。外向性が高いと、参加意識も高く、また、個人意見数も多くなった。調和性も参加意識にプラスに影響し、調和性が高いほど参加意識が高くなった ($F(1,44) = 4.54, \beta = .29, p < .05, \eta^2_p = .09$)。誠実性はどの変数にも影響がみられなかった。

最後に集団生産性として、個人意見の総数を集団別に算出した。個人意見の重複も含み合算した場合、重複を除外した場合の2値を従属変数として、役割、決定の2要因による分散分析を行った。集団数は全8集団で各条件2集団であった。その結果、重複を除外しない場合のみ、役割の効果がみられた ($F(1,4) = 7.86, p < .05, \eta^2_p = .66$; 役割決定群 $M = 16.50, SD = 3.87$; 役割未定群 $M = 23.75, SD = 4.72$)。決定の効果 ($F(1,4) = 4.12,$

$ns, \eta^2_p = .51$)、2要因の交互作用 ($F(1,4) = .23, ns, \eta^2_p = .05$) はみられなかった。重複を除外した場合には、いずれの効果もみられなかった (役割 $F(1,4) = 1.70, ns, \eta^2_p = .30$; 決定 $F(1,4) = 1.14, ns, \eta^2_p = .22$; 交互作用 $F(1,4) = 1.14, ns, \eta^2_p = .22$)。

3. 実験2の考察

実験2は、実験の手続きと、従属変数の各変数の質問項目を再検討して実施した。当事者意識、参加意識、満足度のいずれの変数についても、独立変数の2変数、役割と決定の効果はみられなかった。個人意見数においてのみ、決定の効果が確認された。これより、当事者意識に関する役割の効果 (仮説1) と決定の効果 (仮説2) は支持されなかった。個人意見数に関して、役割の効果 (仮説3) は支持されなかったが、決定の効果 (仮説4) は支持された。

個人特性のうち、外向性と調和性は、参加意識にプラスに影響した。外向性は個人意見数にもプラスに影響した。すなわち、外向性、調和性の高い個人にとって、集団討議課題は適していると考えられる。また、個人意見数を集団ごとに合算して集団意見数として検討した結果、役割の効果がみられ、役割未定条件において集団意見が多く

Table 4 条件別の各変数の平均値と標準偏差値

	役割決定				役割未定			
	発表者決定 * ¹		集団決定 * ²		発表者決定 * ³		集団決定 * ⁴	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
当事者意識	3.31	.67	3.49	.62	3.28	.47	3.00	.60
参加意識	4.65	.73	4.63	.82	4.69	.54	4.70	.63
満足度	4.83	.86	4.56	1.01	5.00	.67	4.86	1.02
個人意見数	2.42	1.16	3.08	1.00	3.15	1.72	3.86	1.29

*¹*N* = 24, *²*N* = 27, *³*N* = 25, *⁴*N* = 26, **p* < .05.

Table 5 役割、決定および外向性、調和性、誠実性の効果

	役割		決定		役割×決定		外向性			調和性			誠実性		
	<i>F</i>	η^2_p	<i>F</i>	η^2_p	<i>F</i>	η^2_p	β	<i>F</i>	η^2_p	β	<i>F</i>	η^2_p	β	<i>F</i>	η^2_p
当事者意識	2.44	.05	.01	.00	2.16	.05	.07	.56	.01	.14	1.11	.02	-.04	.10	.00
参加意識	.00	.00	.36	.01	.09	.00	.21	5.03*	.10	.29	4.54*	.09	.01	.01	.00
満足度	1.40	.03	.98	.02	.03	.00	-.17	1.69	.04	.25	1.72	.04	-.25	2.18	.05
個人意見数	2.69	.06	4.61*	.09	.23	.01	.44	5.40*	.11	.19	.44	.01	-.01	.00	.00

**p* < .05.

なった。しかし、意見の重複を除外すると、その効果は消失した。集団の生産性の測定は試験的レベルにとどまり、再検討の必要性がある。

全体考察

実験1、実験2において繰り返しみられたのは、集団決定が個人の生産性を高めるという結果であった(仮説4)。成員の年齢や属性の類似度が高く階層性の小さい集団においては、決定が集団に委ねられることで、課題への動機づけが高まり、個人の生産性が高まるものと考えられる。一方で、役割の効果はみられなかった。また、当事者意識には、役割、決定の2要因も個人特性の効果もみられなかった。

当事者意識を「集団の成果に自分の働きが関わり、自分の働きで課題遂行のプロセスが異なる」として概念設定した。実験2では項目の内的整合性は高くなったが、個人の生産性との相関や、独立変数、個人特性の各変数とも関連がなかった。当事者意識については、関連要因も含めた概念の再検討が必要である。

本研究の改善点は大きく、以下の2点である。最初に、個人状況が条件から欠けていたために、集団状況との比較による社会的な手抜きの生起の確認ができなかったことである。第2に、当事者意識と生産性の関連性の再検討である。集団成員の当事者意識により集団の生産性が異なると考えたが、本研究では当事者意識を高める操作に失敗し、役割分担の認識と個人の生産性との関連性の検討にとどまった。また、集団生産性については役割の効果がみられたものの、集団数の少なさから十分な検討には至らなかった。集団課題内容、独立変数、集団生産性に関する見直しとともに、さらに検討を進める必要がある。

本研究は第2著者の2019年度卒業論文研究を再分析してまとめなおしたものである。

謝辞

実験にご協力頂いた実験参加者の皆様に深く御礼を申し上げます。

引用文献

- 阿形亜子・釘原直樹 (2008). 相互独立的自己観・協調的自己観が社会的な手抜きに及ぼす影響. 対人社会心理学研究, 8, 71-76.
- 神吉直人 (2019). 製品デザインの成果と調整担当者の当事者意識に関する探索的研究. 組織学会大会論文集, 8, 103-108.
- 小窪輝吉 (1996). パフォーマンスへの内的誘因が社会的な手抜きに及ぼす影響. 実験社会心理学研究, 36, 12-19.
- 小窪輝吉 (2008). 社会的努力に関する一考察: 社会的アイデンティティ・アプローチに基づく研究のレビューを通して. 福祉社会学部論集, 37, 49-64.
- Latané, B., Williams, K., & Harkins, S. (1979). Many hands make light the work: The causes and consequence of social loafing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 822-832.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self-Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 村上宣寛・村上千恵子 (1997). 主要5因子性格検査の尺度構成, 性格心理学研究, 6, 29-39.
- 重森雅喜 (2012). ダブルチェックの社会的な手抜き, 日本認知心理学会第10回発表論文集, 61.
- 内田遼介・釘原直樹・手塚洋介・國部雅大・土屋裕睦 (2016). スポーツ集団内における集合的効力感の評価形成過程: 成員の課題遂行能力に着目した検討. 実験社会心理学研究, 56, 33-43.
- Williams, K. D., Harkins, S. & Latané, B. (1981). Identifiability as a deterrent to social loafing: Two cheering experiments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 303-311.